令和４年度
第２回
総合教育会議議事録

日時　令和５年２月６日（月）午後３時45分～

場所　市役所東分庁舎５階　会議室

第２回総合教育会議　議事録

１　日 時　令和５年２月６日（月）　午後３時45分～午後５時15分

２　場 所　市役所東分庁舎５階　会議室

３　出席者

いわき市長		内田　広之
いわき市教育長		服部　樹理
いわき市教育委員会	委員	馬目　順一
いわき市教育委員会	委員	根本　紀太郎
いわき市教育委員会	委員	宮澤　美智子
いわき市教育委員会	委員	小峰　美保子

４　議 題　(1)　学力向上の取組みと今後について
　　(2)　特別支援教育の現状と今後について

【会議内容】

１　開会

２　議事

会議設置要綱第４条の規定により、市長が議長となること、また、同要綱第７条第２項の規定による第２回会議の議事録への署名は、服部教育長及び宮澤委員が行うことを確認した。

(1)　学力向上の取組みと今後について

①　事務局説明（学校教育課　菅野課長）

資料１「学力向上の取組みと今後について」により説明を行った。

②　質疑・意見等

【根本委員】

・　各学校・クラスに細分化して、カルテを作成し、分析していくというのは、エビデンスに基づく非常に良い手法と思って聞かせていただいた。その中で、点数だけでなく、自己有用感などの非認知能力に着目しているとお聞きしたが、もう少し詳しく教えていただきたい。

【学校教育課長】

・　特に学力の正答率と大きく相関関係がわかったのが、自己有用感と規範意識の２つになる。ただ、全国学力学習状況調査の質問項目では、規範意識・自己有用感というのは２問しかなく、学校や子どもたちの実態を捉えきれていない。その中で、子どもたちがどういったところで自己有用感を感じているといったことや、どういった部分がいわき市の子どもたちの課題、もしくはそれぞれの学校での課題ということで、例えば挨拶や他との関わり、自分のやる気、認められたいなどということを、もっと項目を多くして、より学校と授業に直結するような調査を加えていきたいということで、市独自のアンケートを組み立て、今年度末から次年度にかけて詳細に取り組んでいきたいと考えている。

【根本委員】

・　児童生徒へのアンケートだけでなく、ご家族の方を対象とするアンケートはあったのか。または、今後予定はあるのか。

【学校教育課長】

・　今のところは、児童生徒を対象に調査をしている。今後、例えば家庭での関わりなどが、もし見えてくれば、様々な調査項目を検討していきたいと思うが、まずは、子どもたちの実態、つまりエビデンスを確立させるところから調査を進めている。

【馬目委員】

・　教育委員会で、各学校訪問し、それぞれの課題を認識されたと思うが、その中で、特に重要となるポイントについて、お聞きしたい。

・　より一層議論が活発になるよう、前年度・前々年度等の学力調査の結果も提示いただければと思う。

【教育長】

・　今までのやり方に問題があったということではなく、今までは、どうしても平均点から見た対策でやっていたため、そこが、盲点だったところかなと思う。

・　学力向上というのは、そもそも学校教育の存在意義そのもので、学校の先生としてのあり方そのものでもあるため、既に現場サイドの取組みとして、受け入れられていると感じており、学校として目指すべき日常的・基本的なテーマと思っている。

・　前年度・前々年度など、過去がどうだったかということだが、大体の傾向として、福島県全体がそうではあるが、国語は平均に近い、あるいはちょっと上回ってる年もあるが、算数・数学が少し平均より落ちているとい

う傾向は、前年度も前々年度も同じような傾向である。

【市長】

・　今年度、体制を整備し、全ての学校を訪問して、学校カルテをまとめているところで、まさに今、各学校の課題の洗い出しを行っている状況である。今までは学校の先生たちが一生懸命、努力してやっておられた感じだったと思うが、それが学校カルテを通じて、グラフのようにエビデンスとしてまとまってくると、客観的に市内全体の平均と比べて、今まで気付かなかったけども、算数・数学でこんなところに課題があったみたいな部分が、エビデンスをまとめる中で、見えてきたような状況かと思う。

・　経年との比較、あとは他の学校との比較っていうことで、できるだけエビデンスに基づいてやっていくという手法を取れるようになったのは、今年度になってからだと思うので、段階を追いながら、課題を示していくということと思っている。現時点で課題を深堀りして、十分に出し切れていないという点は反省すべきところと思う。

【根本委員】

・　学校カルテを作成し、分析して取組みを進めていくという手法は、とても素晴らしいと思っている。それによって、学校の先生方の意識も変わって、より良い授業をしていく。それによって学力向上という動きもあるのかもしれないが、例えば、先生だけが自分事になって、児童生徒や保護者、地域で他人事になっているような状態だと、効果は上がらないと思う。もっとみんなが自分事になるような意識づけが必要と思う。

【小峰委員】

・　学校現場で、担任として子どもたちを指導してきた身として、学力向上は一体何のためにするのだろうと考えた時に、子どもたちが将来、社会に出て自立できるようにするために、今持っている力やそういう能力を上げていくことが一番の大きな目標だと思う。それを踏まえると、この学力調査の数値は、あくまでも一つの目安だと考えていかなければいけないかなと思う。

・　同時に、学校の先生はあまり数値化されることに慣れていない部分もあるので、例えば、今回の学力調査の結果で、数学が全国から大分低いことを素直に受け止めて、どうすれば子どもたちにそうした力を身につけさせていけるのかということを考えて、一つの材料にすべきという受け止め方が、すごく大事なのかなと思う。

・　教育委員会として、学校でいろんな課題を受け止めていく学校カルテの作成を進め、その課題に応じて指導していくということは、とても大事な視点だと思う。このやり方は大変だとは思うが、地道に積み上げていくと必ず

結果が出てくるものと思うので、今後もよろしくお願いしたい。

- もう一つ、私自身学校現場にいた際に、家庭学習との連携・繋がりというのをどう持たせたらいいかということもすごく大事な視点だと思った。今、子どもたちはすごく忙しいので、多くやるという視点も大事だが、先生方から、自分の不得意なところを上げていくための手法などを示して、家庭学習の質を高めていくことが必要かなと常々考えていた。そのようなことを進めていただければと思っている。

【宮澤委員】

- 私自身は、まだ子育て真っただ中で、小学校のお母さんなどとボランティアを通して、いろいろ話す機会があるので、保護者の視点から申し上げさせていただきたい。
- 保護者としては、勉強が苦手な子は苦手な子で、将来食べていけるような技術を身に付けさせて職に就かせたいという視点もあれば、黙っていても勉強をやる子には、本当にアカデミックな教育を、可能な限り経済的に許されれば受けさせてあげたいというのが保護者の本音だと思う。
- そう考えた時に、小学校と中学校の理数系の差について、学校訪問をして子どもを見ていると、小学校の算数と理科っていうのは、実生活・実体験に沿った内容で、リアルに子どもたちが想像できる、結果がわかる、こういう意味だと想定できるような学習内容で、そういう流れに沿った教え方を先生たちもしている。中学校に行くと、アカデミックになっていて、この数学の公式は何で覚えなきゃいけないのだろう、大人になった時にどのような使い方をしていくのだろうということが、特に数学について分からない生徒が多い。理科に関しては、授業が楽しい、勉強が好きだという意見が高くなっていて、すごく良いことだと思っており、実生活と紐付けがあるのだなと思う。中学校の数学に関しては、問題を解くまでの思考などが、生き方や論理的に考える思考とも密接に繋がるように思うので、その後の大人の生きる力の思考力に密接に関わってくるという視点からの授業展開なども非常に大事なのかなと思う。
- 学校カルテは非常に意味があって、それぞれカスタマイズするカルテだと思うので、是非よろしくお願いしたい。

【市長】

- 今回学校カルテを作成して、学校を訪問してもらっているが、子どもたちが他の学校と比べて特に苦手だったところや、全国調査でできる問題・できない問題があった際、どこの論理的な思考力でつまずいているのかという分析をして、次に活かしていくことが肝心だと思う。そこからどう課題に取り組んで、苦手だった問題があった場合に、それをどのように授業の中で教えるのかということで、それができる先生が学校の中にいなけれ

ば、市内・県内で長けた先生を呼んで、授業研修などに取り組んで、次の学年にしっかりと繋いでいくことが大事だと思う。

・　何かをインプットして、それをいかにアウトプットするかという受験学力というのはとっくに終わっていて、入試などは人生の通過点で、ロジカルシンキングや表現力などの能力が社会の中で生きてくると思っており、そういう力が本当の学力だと思っている。

【馬目委員】

・　算数と数学が、全国あるいは福島県の平均よりも下回るという数字が出てきているが、これは各学校によってかなり差があるのか、それとも、全国平均に近い学校もあるのかということをお聞きしたい。

【学校教育課長】

・　委員がおっしゃったように、平均値に近い学校もあるし、例えば国語は高い、算数が低い。逆に算数が高く、国語が低い学校もあって、学校によって様々である。そのため、平均値を見るというよりも、その学校の課題を見るということで昨年度から取り組んでいる。

【馬目委員】

・　学力向上などを進める方法としては、先生と子どもとの接触を多くしないといけないと私は考えている。先生との接触を多くすれば、先生の表情を見て、生徒は一喜一憂するわけで、休み時間でも授業でも、何でも先生と対面して言葉を交わすという機会を多く持つということが、直接学力向上に繋がるかどうか分からないが、教育の一つの方針ではないかと思う。

(2)　特別支援教育の現状と今後について

①　事務局説明（総合教育センター　小玉総括指導主事兼所長）

資料２「特別支援教育の現状と今後について」により説明を行った。

②　質疑・意見等

【市長】

・　特別支援学校に通っておられるお子さんの数について、教えていただきたい。

・　市教育支援審議会について、通級がいいかや、通常学級で通わせるような形がいいのか、それとも特別支援がいいかなどといったことを判断する審議会だと思うが、改めて補足説明をお願いしたい。

・　通級という形の中で、LD（学習障がい）・ADHD（注意欠陥多動性障がい）などがあると思うが、全体的な傾向を教えていただきたい。

【総合教育センター所長】

・　特別支援学校の現状として、平成24年度には、特別支援学校の小学部の児童数が137人、中学部の生徒数が62人になっている。令和３年度には、小学部の児童数が160人、中学部の生徒数が81人になっている。

【総合教育センター教育支援室長】

・　先ほどの平成24年度の数については、いわき地区にある特別支援学校である、いわき支援学校・平支援学校・聴覚支援学校平校の三つの学校の数字となっている。令和３年度の数字については、被災により、富岡支援学校が本市に仮設で設置されているため、その数も合わせた４校の数となっている。

【総合教育センター所長】

・　教育支援審議会については、学ぶ場としてそれぞれどこが適切なのかということを審議する場になっている。

・　通級指導教室については、小学校では市内６校に設置されており、言語障がいが５学級、情緒障がいが１学級、ADHD（注意欠陥多動性障がい）が２学級、自閉症に関わる学級が１学級、LD（学習障がい）が１学級。合計10学級設置している。中学校では、通級指導教室を３校に設置しており、自閉症の学級が１学級、LD（学習障がい）の学級が２学級設置している。

【馬目委員】

・　先生が少なくなっている一方、特別支援学級に通う生徒さんが年々多くなっているということについて、それに対する分析や研究等があるかどうか、お聞きしたい。

・　また、特別支援といっても、生徒によって分かれると思うが、どういう人たちが増えているのかもお聞きしたい。

【総合教育センター所長】

・　市内の児童生徒数が減っているのに、特別支援学級に在籍する子どもたちの数が増えているということについては、まず言えることが特別支援教育をめぐる法整備が平成19年度に整備されて、それまでの特殊教育から、それ以降には特別支援教育に変わり、障がいのあるお子さんも、そうでないお子さんも一緒に学ぶというインクルーシブ教育システムが整備され、認知されていったということである。また、特殊教育から特別支援教育に変わって、お子さん一人ひとりの育成や、細やかに寄り添った特別支援教育が世の中に認知されてきたということがあるかと思う。特に、特別支援教育については、お子さん一人ひとりに個別の指導計画を作り、お子さんの特性に寄り添った支援を進めていくという状況であるため、保護者の方も昔とは違って、お子さんの特性に合わせた教育をしていただける、少人数で学べる特別支援教育

を選択する保護者の方が増えてきたと捉えている。

・　どういったお子さんが増えてきたかということであるが、本市の特別支援学級数で分かる範囲で話をすると、障がい種別になると、知的障がい学級の子が、令和３年度は小学校の方が 60 学級、令和４年度は 70 学級と、10 学級増えている。自閉症・情緒障がい学級では、令和３年度は 45 学級あったものが、令和４年度は 53 学級と増えている。難聴と弱視、病弱についてはそれぞれ１学級で、令和３年度も令和４年度も同じで、増減はない。肢体不自由は、１学級から２学級に増えている。全体では、令和３年度は小学校 109 学級だったものが、令和４年度は 128 学級に増加している。中学校に関しては、知的障がい学級が令和３年度は 27 学級、令和４年度は 29 学級。自閉症・情緒障がい学級の方につきましては、令和３年度は 17 学級。令和４年度は 20 学級。難聴学級は１学級のままである。

【小峰委員】

・　少し前と比べ、特別支援教育というものが、いろいろなところに周知徹底され、保護者のニーズがこの子に合った教育を受けさせたいという理解が進んでいく中で、特別支援学級に入れたいという保護者が徐々に増えてきている。あるいは、小さい頃からの検診で早期に発見できるようになったことなどが挙げられるのかなと思う。

・　保護者のニーズも高まってきていることを踏まえると、例えば総合教育センターの先生向けの研修の充実を図るということが一つ挙げられると思う。しかし、普通日に指導力を向上させる研修に先生方が来るということになると、学級が空いてしまい、見てくれる先生がいないということになり、また課題が出てくる。それを踏まえると、アドバイザーによる支援や支援員なども充実していただければと思う。

【根本委員】

・　私も学校訪問に毎年行かせていただいているが、授業を拝見していると、なかなかじっとしていられないような児童生徒さんがいるなと思ったりする。そうした際に、担任の先生が１人だけだと、他の児童生徒のことも指導しなくてはいけないし、同時に複数の対応が難しい場面が出てきてしまうのを体験しているので、一番はマンパワーが大切かと思う。一方で、教員志望者が減少傾向にあり、これからどうなっていくのか、非常に不安なところもある。その中で、支援員も増えてはいるが、要望数を満たしていないということが、予算的な面や待遇的な面で課題があるのかなと思う。

・　支援員の方と先生とのチームワークが大切と思っている。学校の中で、支援員の方と担任の先生、あるいは管理職・学校全体で、担任の先生だけではなく、他の先生方も自分事にして、子どもたちを複眼的に見られるようにしないと上手くいかないのかなと思う。

【宮澤委員】

・　小学校に入るまでは、児童発達支援の施設などでトレーニングを受け、その後小学校に入ったら、今度は放課後デイサービスなどでトレーニングを受けたりする子も多いと思うが、例えば、情緒がすごく不安定で、知的障がいがなくても学校からたくさん宿題をもらってきて、逆に情緒が不安定になり、宿題もこなせないという話も聞いたことがある。本当に個に応じて、よくその子を知るっていうのが、まず必要だと思うので、当事者の保護者さんに寄り添えるような支援として、マンパワーが大事だと思う。

・　一律に学校で目の前のことを教えることも大事だと思うが、この子にはこういう特性があるから、将来はこういう場所で働けるよう、先生方も施設でも小・中学校でこういうスキルを身に着けられるように、こういうトレーニングをしていこうという視点が大事だと思う。

【教育長】

・　まずは人の配置が前提になると思うが、予算も必要だが、そもそも先生のなり手がいないという問題もあって、この特別支援の問題というのは、人材養成の時間より、増え方が早く、急激すぎるというのが難しいところと思う。人材育成も、教員養成だと４年間大学に通った後の話で、すぐに増員というのはなかなか厳しいと思っているが、必要だと思う。

・　専門的知識の習得も重要と思うが、その専門的知識を持った人だけに任せるということだとプレッシャーにもなるので、学校の教職員全体でサポートしていけるような体制が必要だと思う。校長先生の話も聞くと、一部の方だけに任せるのではなくて、周りの人の理解がないと、いくら専門的知識を持っていても、学校の中で上手くいかないという声はいくつも聞いているので、そこをどうするか、校長のリーダーシップによるところが大きいと思っている。今年度から特別支援教育アドバイザーを設置して支援しているが、こうした点を今後補強しながら、教育委員会との接点としては、まずは校長になるので、校長の指導力や経営力ということを通じて、学校全体でサポートしていけるような体制の構築に努めていきたいと思う。

【市長】

・　予算・マンパワーは非常に重要だと思うが、教育長が話したように、学校全体の体制をどのように作っていくかという視点も大事と思っている。

・　例えば、岡山県赤磐市の小学校では、学校の先生全員が特別支援の知識を身に付けるような研修をやっている。校内研修を年に１・２回やった上で、特別支援が必要な子の特性に応じた関わり方というものがあるので、全教員で研修をやって、全ての教科でいろんな教科の先生が対応するような、先生同士のワークショップも始めている。あとは、障がいのある子などがいた

際にどのように接するのが良いか、学校教育の中で、子どもたちも入れてワークショップをやっている。先生と子ども、子ども同士の関わりも非常に上手くいって、不登校の子がいなくなったり、いじめも激減したりしている。

- 市内だと、小名浜西小学校に行った際、校長先生のリーダーシップがすごいなと。発達障がいの子や特別支援が必要な子どもたちの関わり方というのを、校長先生だけではなく、先生たち一人ひとりがみんな共有している。支援が必要な方がいる場合は、情報を職員会議などで共有しながら、特別な教育をする時だけでなく、普段の国語の授業や算数の授業でも一緒に共有しながら、関わっている取組みがあった。そういった素晴らしい取組みをモデル的に広げていくようなことも必要かなと思う。
- 総合教育センターで事例等の情報収集しつつ、様々な先進事例を学びながら、取組みを進めていくことが重要だと思う。
- 究極の目的というのは、一人ひとりの子どもが、自分の特性や性格も分かった上で、ちゃんと幸せに、しかも仕事を持って働いて、社会的に活動してもらうことだと思う。できる限り早い段階、小さい時の健診などで診断されたら、より子どもの幸せのことを考え、どのようにトレーニングしていくかということを、いろんな人で関わってやっていくというような特別支援が必要だと思った。

【根本委員】

- 今回は学力向上と特別支援教育ということだったが、それ以外にも、学校の児童生徒に対しては単眼的な見方ではなく、複眼的な見方というのがとても大切かと思う。学力や特別支援といったことを抜きにして、本当にできるだけ広い目を持って、教職員・学校の先生方には見ていただくという組織になることが大事と思う。
- 学校の教員志望者が少なくなっていることもあり、学校の先生方は踏ん張りどころと思う。学校の先生になりたい気持ちは、担任していただいた先生や指導してもらった先生の姿を見て、あの先生のようになりたいという憧れみたいなところから生まれると思う。そのためには、先生方も認められたという気持ちが必要だと思うので、市長・教育長・校長先生・教育委員会の皆さんなのかどうかは分からないが、良いことがあったら、先生方のことを認めてあげていただきたいと思う。
- 最近いわき志塾に行った際に、小学４年生から６年生までの 37 名の中で、先生になりたいという児童が５名、保育士になりたいという児童が２名いた。まだまだそういう児童はいるので、その数が学年が上がるに従って減らないように、増えるように、本当に先生方には頑張っていただきたい。

３　閉会

【署名】

服部樹理

宮澤 美智子